

# 普及技術概要書

## ヤイトハタの中間育成における種苗選別の効果

[要約] ヤイトハタ中間育成で選別の有無による生残率を比較した。その結果、選別区では高い生残率を示し、選別サイズによる差も見られなかった。

研究機関	水産試験場 八重山支場			連絡先	09808-8-2255		
部会名	水産	専門	種苗生産	対象	ヤイトハタ	分類	研究

### [背景・ねらい]

現在のヤイトハタの種苗サイズは、取り上げ時の取り扱いの安全性を考慮して、全長35mm内外である。また、養殖用種苗サイズは50mm以上となっており、この間を中間育成としている。これまで、中間育成に関しては飼育密度と生残率の関係について述べられているだけである。そこで、種苗減耗の主要因である共食い防止に有効であると考えられる種苗サイズの選別の効果を調べた。

### [成果の内容・特徴]

- ①選別にはスリット式の選別器を作製して用いた。選別区では平成12年4月30日から6月21日にかけて生産された種苗を用い3段階(平均体長:大群39.9mm、中群33.2mm、小群27.6mm)に選別し中間育成を行った。また、無選別区(平均体長23.3mm)は平成12年6月3日から7月19日にかけて生産された種苗を用いた。
- ②飼育は250及び60kl水槽に設置した3×3×2mの生け簀網で行い、給餌器でマダイ用EP餌料を残餌が出る程度の飽食量を与えた。飼育期間中の水温は28.0～30.5℃の範囲であった。
- ③無選別区での生残率は26.2%だった。一方、選別区での生残率は95.1%で大群、中群、小群それぞれの生残率は95.5%、96.1%、93.8%と大きな差はなかった(表1、図1)。
- ④飼育密度による生残率には差はなかった(図2)。

### [成果の活用面・留意点]

- ①ヤイトハタの中間育成技術に必要な知見である。
- ②選別サイズについては任意に設定したため、今後検討が必要である。
- ③飼育密度は経験上収容上限を2000/m<sup>2</sup>としているが、選別サイズ毎の適正収容密度の把握が必要である。

表1 選別飼育による中間育成結果

グループ名	無選別	3段階選別		
	飼育面数	大群×2面	中群×4面	小群×1面
育成期間(日)	15	10~13	13~14	19
開始サイズ(mm)	23.3	39.9	33.2	27.6
(最小-最大)	(18.0-35.8)	(34.7-46.6)	(27.8-40.9)	(22.6-32.7)
終了サイズ(mm)	53.4	56.3	55.4	58.5
(最小-最大)	(40.8-70.2)	(42.5-67.5)	(45.0-69.0)	(47.5-68.2)
期間成長(mm)	30.1	16.5	22.1	30.9
日間成長(mm)	2.01	1.4	1.6	1.6
生残率(%)	26.2%	95.5%	96.1%	93.8%
開始密度/m <sup>2</sup>	1,118	1,928	2,241	1,460
取り上げ密度/m <sup>2</sup>	293	1,841	2,153	1,370

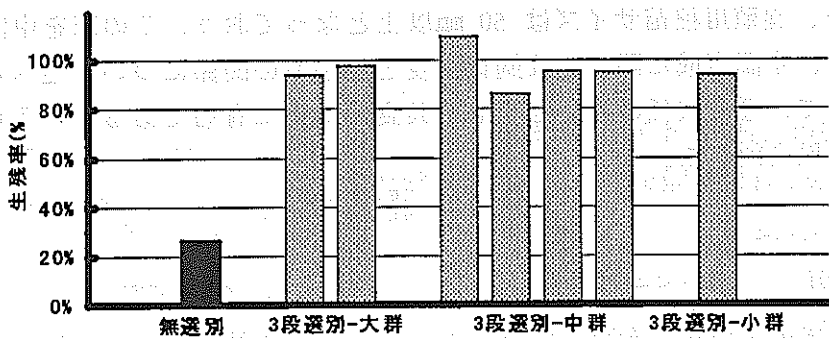


図1 選別群毎の生残率

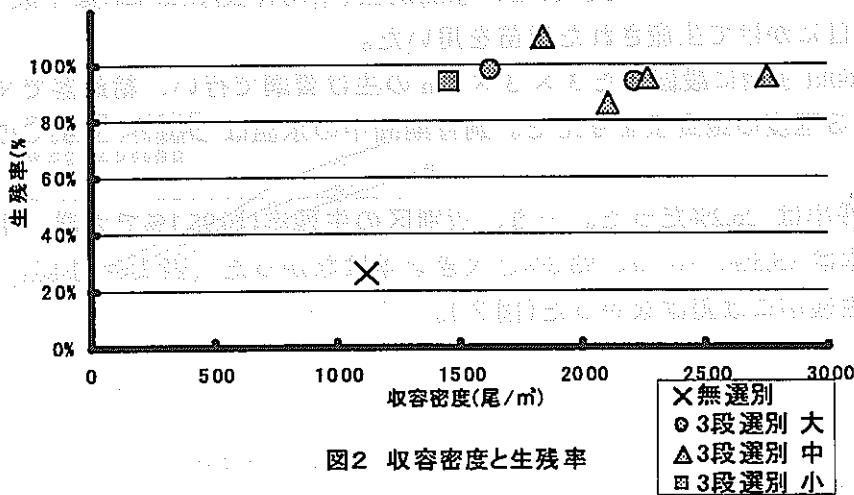


図2 收容密度と生残率

[その他]

研究課題名：ハタ類種苗生産養殖技術開発試験

予算区分：県単独事業

研究期間：平成12年度(平成11~12年)

研究担当者：仲盛淳、勝俣亜生、大嶋洋行、岩井憲司、仲本光男

発表論文等：平成12年度沖縄県水産試験場事業報告書(掲載予定)